

浄土

1983-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一區日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特設按承認雜誌)第三二五号
昭和五十八年七月二十五日印刷 昭和五十八年八月日発行
第四十九卷 八月号





草　　む　　し　　り

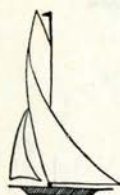
邪（よこしま）な心を清める墓掃除

夏の日の炎天下、草取りに励む。雑草のひねくれて繁った強い生命力を根こそぎむしろうとするが、なかなかほかごるものではない。根強く群生する草々のいのちと、おのれの邪な心との戦いである。貪（むさぼり）、瞋（いかり）、癡（おろかさ）の三毒の煩惱が、私の草むしりの未熟な技術に反映する。臼田亜浪という俳人は、「墓起す一念草をむしるなり」と詠んでいるが、私の一念は、一草の雑草の執念にしばされたじとといったところである。草々の根の、強く深く入り組んで、あちらに這い込み、こちらに伸び茂る、そのひねくれさ、ねじまがりかげんは、まったく私自身の生き様、私自身の心の具合でもあらうか。

墓掃除をしながら、亡き人のありし日のことなどをふと思いなつかしむ。遅々とした日明かし、日暮らしながら、ともかく遠い先祖のありがたいのちを受け継がせていただいているのである。雑草の生命力をみずからのいのちに吸収して、できうるならば、清らかな、明かるい、正しい生活を目指したい。

（勝崎裕彦）

八月号



神力大光を演べあまねく無際
の土を照し、三垢の闇を消除して
広く衆（もろもろ）の厄難を済う。

——『無量寿経』四誓偈

目次

法 話

は月雑感

一心豊かな生活を——牧 達 雄……(2)

八月盆の頃……藤 原 円 忠……(7)

海外の念仏の声するところ……金 田 明 進……(14)

(一)(口)(法)(話)

仏は行者の腕を握って離さない……村 瀬 秀 雄……(12)

特別寄稿

安西法師のこと……小 島 泰 雄……(19)

——奇蹟以上のもの——

『念仏ひじり三国志』をめぐる

——編集者からのメッセージ——佐々木 清 昭 ……(25)

エッセイ

卒業式前後(一)……木 下 隆 一……(29)

拈華微笑

——芭蕉の生き方について——河 野 喜 雄……(33)

図 説 図 画 日 記

八月、盆と盆踊り……鷺 見 定 信……(40)

浄土句集……田 牛 畝 選……(38)

<表紙裏・巻頭言> 草むしり……勝 崎 裕 彦

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部



法 話

は 月 雑 感

— 心豊かな生活を —



一 八月のお盆

八月は、関東以外の多くの地方では、お盆月です。

お盆には、年に一度ご先祖さまが、お里帰りをされます。この日、お嫁にいった人も、

牧 まさ
達 たつ
雄 ゆう

(草津市西方寺住職)

都会で働らく人も、みんな故郷に帰り、ご先祖さまを中心に、水入らずの親しい心の交りをいたします。

さしもの大東京も、八月のお盆には、都心部から雑踏が消えます。東京は七月のお盆なのです……。

お盆とならぶお正月は、関東、関西の別な

く、全国的にお正月ですが、お盆は、全国的行事でありますのに、統一されていません。わざわざ関東のお盆、関西のお盆などといわなくてはならないのです。

うがった考え方をすれば、明治五年、太陽暦を採用した明治政府の、国民生活、特に宗教的生活を無視する態度、あるいは配慮のなさから、このような混乱が残ってしまったのではないでしょうか。あるいは国民が、お盆に関してだけは、簡単に明治政府の指導を受け入れなかったのかも知れません。

ともあれ、お盆は、人々の宗教的な心情に深く根を下ろした行事であります。とくに農耕生活との関わりを無視することはできません。

七月の中旬は、以前は農繁期のさ中ででした。田植えにつづく草刈りの真最中です。とてもお盆どころではありません。八月になって、やっと心落ち着くのです。日本の文化は、稲作文化です。生活のすみずみまで、農

耕との深い関係が残っています。ですから、八月になって、やっとお盆の雰囲気が出てくるといえましよう。

ただ最近の農業は、ずい分様子がかわってきました。田植えも機械化で、いつが農繁期かわからない程です。したがって、八月のお盆といっても、以前のような実感がわいてこないといえます。民間の企業は、お盆の休みをとるところが多いのですが、官公庁は無関係です。また、新興住宅街等の核家族家庭では無関心な人が多いと思われます。

しかし、祖先との交わりだけは、大切に存続しなくてはならないでしょう。そのためにも、単なる伝統的習慣だけに終ることなく、その意義を宣揚することが大切だと思います。

二 一 はづきということ

八月のことを、古くは葉月とよびました。

その語源は、日本国語大辞典によりますと、大別して三つの考え方があるようです。

先づ新暦の八月は、残暑きびしく、緑陰の涼風がこいしいのです。葉月といいますが、緑色濃き葉を思いますが、実は、本来は秋のこと、葉落月（はおちつき）からくるといわれます。一葉散って天下の秋を知る、黄葉の月なのです。緑色濃き葉とは、およそイメージがちがうのです。

この季節になりますと、稲穂はふくらみを増します。早稲の稲穂は花を咲かせます。こんなところから、穂張月（ホハリツキ）といえます。また花月（ハナツキ）ともいいます。これをつまって、はづきというのだとされます。また端月（はづき）といって、稲穂がようやく葉先に出てくることから、はづきといえます。要するに稲作との関係がふかく、心のこもった観察からきています。

農耕の変化は、八月に丁度この時期になりました。これだけは新暦と一致するようです。

す。

さて、この頃渡り鳥の雁が来ます。雁は秋、日本に飛来し、春に日本を飛び去ります。古への人たちは、雁の渡来する鳴き声（かりがね）に、秋の深まりをしみじみ味わったことでありましょう。この雁がはじめてやって来る月が、初来（はつき）であるといえます。万葉集に、

「今朝の朝は、雁の鳴音（かりがね）聞きつ

春日山 もみちにけらし 吾が心いたし」とありますが、季節の移り変りに敏感であった日本人の心が、「吾が心いたし」の一句によくあらわされているといえます。しかし昨今は、余りにも騒々しい巷の音に、雁音も、その情趣を失っています。

八月と、単に数字で表わす呼び方は、便利でし、否定することはできませんが、はづきと呼ぶ、呼び方には、自然のうつろい、稲作に対する限らない愛情、渡り鳥に対するやさしい心づかいが感ぜられます。日本人の心



豊かな生き方がそこに息吹いています。

三 地藏盆と子どもたち

夏休みも終りに近づく頃、関西の子どもたちは地藏盆で活気づきます。

いつもは、街角で、自動車の騒音に包まれたお地藏さま、また村々の辻に、ひとり淋しく雨にうたれ、雪に被われていらっしやるお地藏さまの前に、この日ばかりは、子どもたちの声がはずみます。お地藏盆です。年に一度のお地藏盆に、子どもたちが集っています。

ふだん、子どもたちはどこへ行ってしまったのでしょうか。街かどに、村の辻に、子どもの姿はありません。塾だとか、クラブ活動に、大人ばかりでなく、今日この頃では、子どもまでが、多忙なのです。ゆとりがなくなっています。

以前、街かどに、村々のはずれに、子どもたちが群れ遊んでいました。そして、そこに必らずお地藏さまが、子どもたちを見守っていらっしやいました。子どもたちはお地藏さまにお花を供え、掌を合せていました。今ではその子どもたちの姿が見当らないのです。せめて地藏盆だけでも、お地藏さまの前で大いにはしゃいでもらいたいものです。

ひと時、地藏盆に大人があまり手を借してはいけない、もっと子どもの自主的な運営をさせよう等と、地藏盆をめぐる議論が盛んでした。最近、公共の土地に、お地藏さまを祀るのは怪しからん、信教の自由、政教分離を侵かすものであるとして、市を相手に訴訟をおこした牧師がいます。理は通りましようがどれもこれも、大人の議論でしかありません。子ども不在の議論です。

子どもたちが、塾通いに追いまわされて、ゆとりを失ってしまうのも、親たちの責任ではないでしょうか。



ふだん、日本的な情緒からおよそ縁遠かった団地の一角に、せっかくお地藏さまをお祀りし、楽しいお地藏さまのお祭りと、心はずませていたその子どもたちから、お地藏さまを取り上げてしまうのも、大人たちの心ない仕わざではないでしょうか。合理、合法も大切ですが、おおらかに子どもたちを育ててゆくことも、より大切だと思います。

失われゆく伝統行事の中で、子どもたちのかかわる行事だけは、おおらかに、まもっていききたいものです。

四 心の豊さを培う

明治維新は、近代日本の夜明けでした。明治政府の政策は、日本の近代化をおしすすめる上で、世界に比べて類を見ない功績を残しました。特に学制の発布と、教育の徹底は、近代化をすすめる上で、大切な役割を果たしました。今日の日本の経済的發展は、その基礎

をここに見てもよいと思います。

しかし、その中で、基本的に、そして決定的に誤りを犯したことがあります。それは宗教政策であろうと思います。宗教軽視の風潮を助長したことです。それが教育の面では、科学万能、合理主義偏重の教育になってあらわれます。

工業社会がどのように進み、技術の革新がめざましい進展をとけても、所詮は物の世界です。心が貧しくては、本当の幸福はないといっても過言ではありません。明治の教育の誤まりは、その道を深めることを忘れた点にあります。

農耕社会へかえることはできません。失った自然をとりかえすことも困難でしょう。しかし、まだ残されている伝統的な行事を考え直し、自然を守る道は閉ざされてはいません。八月は、お盆、地藏盆などの行事を通して心の豊かさ、宗教情操の豊かさを培う月ではないでしょうか。

おぼん法話

八月盆の頃

○ 私わたしの寺てらの在ある地方ちほうは、お盆おぼんは八月、月つきおくれのお盆おぼんである。

八月のお盆おぼんは七月のお盆おぼんに比べて一段と暑



藤ふじ原わら円えん忠ちゅう

(市原市無量寺住職)

さも厳げんしく、寺てらの所在しざんする町内まちうちのお檀家だんかさんのお宅たくを一軒一軒廻めぐってご回向くわいこうする。お棚たな経きやうも気が急いそぐあまり昼食ひるめしも取とらず一生懸命いっしょうけんめい歩いてゐる内に眼めの前まへがくらくらと暗くくなる事も幾度いくどか有あったが、汗あせだけで勤こめる八月の

お盆は、暑い反面一生懸命やったという清々しさも又一入のものである。

私は小学生の頃からお棚経廻りをしたが、檀家さんの家が判らないので、地理に明るい人をお願いして道案内をもらった。その道案内をして下さった人が大変身体の大きな人だったので、仁王様が観音様を連れて来たなどと笑われたりしたが、お棚経廻りをして毎年楽しいなあと思う事が一つ有った。

当時は未だ稲田が多くて、こちらの檀家さんからあちらの檀家さんへ行く途中で良く稲田の中を通った。稲の穂の色を眺め、風にゆれる稲の葉先を見乍ら稲田道に一步踏み入ると、今迄と別の世界に来たような気分になったものだ。先ず足に当る土がやわらかくて生きている土だなあと思い、腰の上迄も稲に囲まれ乍ら更に進むと稲の葉のすれ合う音が心地良く響いていつしか市井の雑音は遠のいてだんだんと心落ちつく思いであった。稲の葉を突然に伏せて起こる風は一瞬にして身体に

滞った熱気を拭い去り、やがて稲の息づきが肌で感じられる頃には正に「生き返った」という感じで、その時ばかりは大変に心うれしくなったものである。

成長してからもそんな思いは続いて、「盆僧を迎え入れたり稲穂風」などと下手な俳句をひねり乍ら涼風を楽しんだが、その稲田も住宅の増えた今日では影薄く力弱いものとなった。



八月の一日には、地獄の釜の蓋が開く、と言って、一日からは寺内のお墓を洗いに来る人が有り、七日には盆供と言って新盆のお施主さんと親戚の方々がお寺へお米を納めに見える。盆供が過ぎる頃から普段は静かな寺の境内も墓石を洗い浄める人達で急に賑やかになる。各々がタワシ持参で墓石に水を掛けてはゴシゴシと一年間の垢苔を洗い流し乍ら隣りの墓地の人々と挨拶やら世間話やらが始ま

る。墓石がきれいになると今度は海から荒砂を取って来て墓域内に敷きつめて、墓石前にはお供え物を載せる供物段をやはり荒砂で一段高く作る。更に瑞々しい孟宗竹で作った花立てが供えられる。

元々雑草はあまり生やさないようにしている墓地だが、お盆のこの時機には墓地の中が面目を一新して清々しいというか荘厳な雰囲気強くする。

お墓の清掃が出来るとお檀家さんは仏壇の飾り付けをされる。マコモで編んだゴザか花ゴザを用意して、新盆のお宅は精霊棚を別作り一般のお宅は仏壇で、前面に笹竹を立てたりして、いろいろと心をこめて飾り付けをしてみ霊を迎えるが、新盆家は白い提灯、一般の家は模様の入った提灯を持ち、真新しい着物を着て、家族子供を連れ親戚の人も一緒にについてお寺の墓地へ迎えに来る。「今年は、うちの先祖は早めにお迎えをして、〇〇さんの家が新盆だから一緒に迎え上げて上げ

るんですよ」などと同じ人が何度もお寺へ来て、その都度お墓へお線香を上げ、ナスとキヌウリをアラレ状に細かく切ったものに洗米を混ぜたお供え物を供えてから、提灯に灯を点してみんなで家迄お迎えする。

み霊迎えの日のお寺はにぎやかで、久し振りで郷里へ帰って来た人達も居て、お迎えの人同志、又寺の家族達と懐かしく話しているうちに線香がとまってしまったなどというのも良く見る風景だ。檀家さんがみんな帰って静かになった墓地には灯籠の灯だけが後を護っているように点っている。

お寺からお棚経に伺っても、いつも一緒に住んでいる人以外の家族や親戚や友人の人達が居て急に賑やかになった感じである。先祖に関係がありそうな書や画の類いが飾ってあるのも、先祖のありし日を偲ばせて良いものだ。

十五日には多勢でご先祖を送って見える。灯を点した提灯を家から持って送って来て、

お墓の前で灯を消してお送りする。この時は
お供え物もお線香も供えないのが習慣だが、
近頃は十五日だけしか郷里に帰れない人も居
て、そういう人はどうしてもお線香をお墓に
供えたいようだ。

旧家というか、しきたりをちゃんと守って
いる家の人をご先祖を送ってお墓へ入れば、
十五日が過ぎて十六日が始まる頃の時間であ
った。

もともと送り火と言えは十六日なのだが、
この頃は夜は自動車が危ないからと十五日の
夕方前に送って来る人もいる状態なので、私
の寺では、せめて新盆の家は十六日に送りな
さい、十五日はまるまる家において上げなさ
いと指導している。

十六日にはご本堂でお施餓鬼^{がき}法要が営なま
れる。冷房に慣れた人達にはご本堂に多勢集
まる人いきれは大変なものらしいが、これも
大事な行事である。

十七日からは近隣のお寺さんでお施餓鬼法

要が営なまれ、二十四日には海で亡くなった
人達の霊を念仏講の老婆連が供養してお盆の
行事が終る。以上が、変らない毎年の経過で
ある。



お盆は、目連尊者が、生前の業^{ごう}によって餓^が
鬼^{どう}道におちて苦しまれていたお母さんを救お
うとして始められた行事であるが、そこには
亡き人と今生きている人との心の通い合いが
根底にあるわけである。それでこそ現在のお
盆という行事が残された意味合いでもあるか
ら、その心の通い合いを忘れてはならない。

お盆にはみんなが心のふる里へ帰ることが
出来る。帰る故郷のある人達には国鉄を始め
多くの交通機関が臨時ダイヤを組んだりして
くれる。帰る故郷の無い人達にも先祖を迎え
て心の交流を交すということは、同じように
することが出来る。

同じ土地に住む親戚や友人達はこの期間は

お互いに行き来して、お互いに仏壇をお参りし合つて先祖の霊も慰さめ合う。

故郷で待つ人、故郷へ帰つた人、近くに住んでいても普段はご無沙汰の続いている人達にとつては平素の疎遠を謝し、そして許し合ひ、交流の深まりが進み、お互いに孤独でなかつた自分を実感する、そんなチャンスでもある。

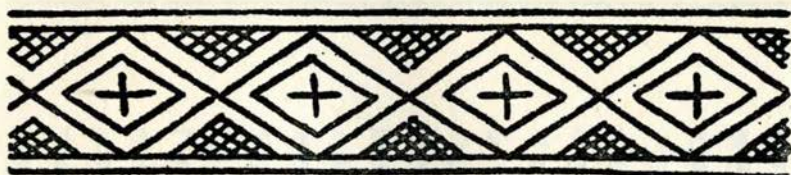
疎外、反発、批判、いら立ちというような傾向の強い日常の社会から抜け出して、仲間がいる、許し合える仲間がいる、理屈をこえつたつながりの仲間がいる、「昔からどこかでつながりがあつた人達がここにいる」「これからもお付き合いをする人達がここにいる」というような心の安らぎにも浸ることになるだろう。

しかし、こんなお盆にも残念に思うことがある。それは集まつた人達に親しさが増し酒を酌み交している内にお互い遠慮が無くなり過ぎて起こる喧嘩も少なくないことである。

人間は百人が百人、千人が千人、少しづつ考へることがちがうものだ。お互いにゆずり合つて人と人の間の調節を大事にしてこそ、仲が良いというものだ。私と相手の人の間をとり払つて私と同じ考えを相手に持たせようとするのは無理というもので、お互いに注意したいと思う。

さてお盆の期間が過ぎると、みんなが働きの場或いは学びの場等へ向かつて動き出す、丁度大洋を航海中の船が、時折りは港へ寄つて、又活力を得て船出するのに似ている。

現在日本は不況のどん底だ、と言われているが、それでも過去と比べれば経済的には空前の成長を遂げたものだ、と思ふ。しかし心の世界では何かしらイライラするような不安の毎日である。そういう時代であるから、「先祖も生き生きと喜び、私達も孤独から生き返るような」お盆の行事を、みんなで大事に護り育てて行くべきだと思ふ。



(一) (口) (法) (話)

仏は行者の腕を握って離さない

お 雄 秀 瀬 村

阿弥陀仏は無量無辺の光明を放って十方の世界を隈なく照らし給うているが、これもまた大慈悲の心から出た救済の手立てであるに外ならない。經典には、

「もし人が阿弥陀仏の光明に照らされ、慈光に浴することとができれば、身も心も柔軟となり、その人の貪り、怒り、愚かさの煩惱が消滅し、かわって悦びの心が満ち溢れ、自然に善心が起ってくる。もしも地獄、餓鬼、畜生の悪世界におちて、激しい苦しみを受けている者があれば、その者が仏の光明に照され、苦しみが休息し、再び苦悩に悩むことがなくなる」

と説かれている。仏の光明はこの世の凡夫ばかりでなく、悪世界にいる者の苦悩までも救い給うのである。しかも光明と聞くと直ちに太陽や電燈の光を連想してしまうために、仏の光明の御力が判り難くなってしまう。法然上人は、仏の光明を無礙光と名づけているそのわけについて、

「この世界の日、月、燈燭などの光は、もし遮るものがあれば影をつくり、その先を照らすことができない。ところが仏の光明は十方の世界を徹照しないということがない。もしそうでなければ、この世界の念仏の衆生が仏

の光明に摂られることができなくなる」

と仰せられている。徹照とは遮ざる物があつても、それを貫き通して照らし給うことである。また摂めるとは摂取のことであつて、仏は念仏を唱える者を一人も捨てずに救い上げ給うことである。それにしても摂取不捨という意味が、もう一つはつきりと到らないような気がする。

むかし徳大寺の唯蓮房という僧が摂取とはどのようなことか知りたいと思ひ、雲居寺に七日間の参籠をして祈禱をこめた。すると満願の夜に夢を見た。本尊の阿弥陀仏がお手を伸ばして唯蓮房の腕を握り、摂取とはこのようなことであると告げ給うた。つまり仏は念仏を唱える者を抱いて、手離し給うことがないといふのである。このように仏の御手の中に摂められるからこそ、貪り怒り愚痴から起す罪から免れられるのである。法然上人は次のように仰せられている。

「仏の光明を清浄光と申し上げるわけは、この光明に触れる者の淫貪と財貪の心を除くからである。貪を不浄と名づけるが故に、清浄をもって光明の名としたのである。至心に専ら念仏を唱えれば、仏は無貪清浄の光明を

放って照触摂取し給うが故に、姪貪財貪の不浄を除き、無戒破戒の罪が乱れ起るのを滅して無貪善根の身となり、持戒清浄の人と等しくなれる」

「仏の光明を歡喜光と申し上げるわけは、この光明に触れる者の怒りの罪を滅するからである。もし多瞋の人が専ら念仏を唱えれば、仏は歡喜光をもって摂取し給うが故に、怒りの罪を滅して忍辱の人と同じになれる」

「仏の光明を智慧光と申し上げるわけは、この光明はよく愚痴の罪を滅し給うからである。たとえ無智の念仏者であっても、仏の智慧光がこれを摂取し給うが故に、よく愚痴の罪が乱れ起るのを滅して、即ち智者と異なることのない者となることができる」

念仏を唱えていれば持戒清浄の人、忍辱の人、智者と同じようになれるといふことは、言葉に尽せない慈悲であることを肝に銘じておかななくてはならない。もし念仏を唱えていながら姪欲や財欲を貪り、腹をたてて怒り、愚かしいことを行つていたとすれば、果してその者の念仏にどの位に真実な心があるのであるうかと疑われても仕方ないし、われ等もまた十分に自戒しなくてはならぬことである。

海外の念仏の声するところ



一 ブラジルの念仏

五月の二十日午後三時に大阪空港を飛びたつて成田でパンアメリカンに乗り換えロスアンゼルスで乗り換え、また更に南米ベネズエラのカラカス空港で給油、南下してブラジルのリオデジャネイロを経てサンパウロ空港に

かね だ みよう しん
金 田 明 進

(取手市弘経寺住職)

到着したのは二十一日の朝だった。但し途中日付変更線を通過したから全所要時間は恐らく三十時間以上であつたらうか。

浄土宗開教振興協会事務局主催の「浄土宗ブラジル開教三十周年記念法要、マリンガ日伯寺本堂落慶法要参列」のための訪伯旅行に参加したのである。山口諦存局長を団長とする一行十八名であつた。武田宗務総長は所用

のため一足さきに出発されたし、総本山知恩院執事長鵜飼隆玄師の一行八名は、別便で到着された。二十一日サンパウロ日伯寺では佐々木陽明南米開教総監を始め在留開教員、寺族一同、檀信徒代表等の心からなる歓迎をうけた。

かねてから長谷川良信先生の偉業の展開と現佐々木総監の懸命な努力の現況を、この眼で見るために訪伯の機会を希望していたが、今回その願いを果すことが出来たことは、私の生涯にとって大変な喜びであった。到着の翌日五月二十二日午前十時にはサンパウロ日伯寺(南米開教区浄土宗別院)に於て南米開教三十周年記念大法要が浄土宗事務総長武田齋彦師導師、脇導師知恩院執事長鵜飼隆玄師、開教総監佐々木陽明師、今回訪伯の我々教師も随喜して盛大に営まれた。参列の来賓檀信徒は本堂に溢れ、頗る盛会であった。

それにつけても、三十年前、終戦の混乱相つづく中で、わが師長谷川良信先生が、日本

を離れて何千里のここブラジルの地に、よくも念仏の法幢をうち立て下さったとしみじみ感謝讃仰の念を禁ずることは出来ない。長谷川先生のあの恩顔が彷彿として目の前に顯られ立つのである。長谷川先生はいづれの地にも寺院を建てるに当っては必ず社会福祉施設を併設せられた。ここサンパウロでも日伯寺の福祉施設として数十キロ離れたイタケーラという所に「こどもの園」を経営し身障者の収容施設があり、広々とした敷地の中に百名近い若き身障者のために多勢の指導者たちが師となり友となつて奉仕している。手芸部あり、陶芸部あり、養鶏部あり、ハンダーを背負つた若ものたちに明るい希望を与えている。二、三年前に二階建ての本館も立派に建設され、サンパウロを中心にブラジル各地に何千人という後援者をもっている。その本館の玄関の内部に長谷川良信先生の胸像が置かれてある。それは温顔そのものの先生で、接するものに福祉活動こそ仏教布教の中核であ

り、念仏弘通の中心事業であると説かれてい
るお姿である。私はこの胸像に接し、よくも
良信先生がこの地にまでその信念を具体化
し、三十年経た今日、ブラジルの灯をいよいよ
明るくともされていることに感動を覚えるの
であった。と同時に、現南米開教総監佐々木
師が、長谷川先生の御遺志を体して、外地に
於ける一切の障害を排除し、信仰あつきの留
邦人の信頼と協力を得て、信仰と福祉の渾然
一体になった念仏布教を強力に持続せられて
いることに感激を覚えたのである。まことに
ブラジルの念仏は、かかるすがたでいよいよ
発展しつつあることを有難く思うのである。

五月二十九日にはサンパウロから五百キロ
も西部にあるマリンガという新興都市に開き
建てられた日伯寺の本堂が新築完成されて、
その落慶法要が営まれた。われわれ一行は
皆その盛儀に参列した。武田総長、鵜飼執事
長、山口開教事務局長、佐々木南米開教総監

もみな法服に身をかため威儀正しく慶讃法要
を行った。稚児五十人余その装束も冠、衣、
袴、みなブラジルで整えられたという。

マリンガという市街は自然林を開拓してつ
くり上げた近代都市で、道路も放射状につく
られ、緑と花と森が美しく整った市街であ
る。ここに近年日本人開拓者も多く居住しブ
ラジル開発の原動力となっている。そしてマ
リンガ日伯寺はやはり長谷川先生の指導的信
念に従い、養老施設をもった浄土宗寺院であ
る。三十年、五十年前に移住して、汗にまみ
れて開拓に献身された日系老人たちが、明る
い念仏信仰の中で喜んで共同生活をしている
養老施設である。ひろい境内地も、皆日系人
の心からなる協力の所産である。そこに今回
内地でも稀に見る立派な本堂が建立されたの
である。

このマリンガは文化体育協会という強力な
日系人を中心とする組織があり、その会館を
もち堂々たる文化都市である。かつてこの地

を訪れられた皇太子殿下御夫妻や浩宮様御来訪の記念樹が日本庭園に建てられてあった。

日系人はここマリंगाでも中心勢力をもつて活躍している。日伯寺の総代岡本パウロ氏も九十歳の父上の代から浄土宗の信仰家であり、よき協力一家である。マリंगा日伯寺落慶式でも一つ感激したことがある。それは式典のあとの清興である。お祝いの三番叟を立派に舞いおさめられる。なつかしい日本歌謡曲を歌われる。浦島太郎の舞踊も見事であった。しかし清興のあとで本堂の全員が「あふるさとへかえろかな……」の歌謡を高らかに歌ったときは涙が胸につまったのである。やっぱり日系人はみんなふるさと日本がなつかしいのである。そしてそのあとでお年寄も若い人も御婦人たちは浴衣着に舞帯をしめて団扇をもって盆踊りである。雨が降ってきたので新しい本堂の回廊をめぐって手ぶりも面白く踊る姿はブラジルにいると思われぬ日本の郷土色であった。こうした歌も踊りも、み

な本尊阿弥陀さまを囲んでの喜びのすがたであった。

そして本堂の下階は祝いのパーティーが始まっている。新本堂を形どったケーキを中心に祝いの御馳走である。宗務総長も執事長もみんな日系信徒と溶け合って箸をとる。楽しい日伯交歓の一ときであった。

かくて仏教東漸と云うか、念仏東漸とか、南米の天地に念仏の声がひろがってゆくのである。長谷川良信先生のおかげだ。現佐々木開教総監のおかげだ。総監を助けて日々精進している開教員諸師のおかげである。ああ念仏の声高らかにサンパウロ、マリंगा各地の日伯寺で称えた念仏よ、大西洋の海までも、南米の奥地までも、念仏の声ひびく喜びを心強く感得して来たのである。

二 太平洋のまん中でお別時を

ことし春ひがん前、私は十日ほどハワイで

過ぐすことが出来た。静かな気持で、自由にハワイの親しい師友をたずねたかったのである。そして諸師の開教への御努力精進の姿を拝みたかったのである。二月二十三日ホノルル別院に新保義道総監を訪れ、御本尊にお参りした。御夫妻とも御元気で、喜んで私と同行の家内をお迎え下された。そして翌日は、オアフ島の一周ドライブを新保総監自らハンドルを握って御案内下され、真珠湾の戦跡を弔いハレイワの浄土院（今は亡き宮本文哲善導寺御法主のかつての住職寺）を参拝し、田中一雄住職と会談し、モルモン教の総本部等を見学させて頂いた。

ついで空路ハワイ島に渡りヒロ明照院に参拝せんとヒロ空港に降り立てば、中村良観上人が空港へお出迎え下され、懐しき拝顔、その夜はボーイカブスカウトの任命の集いに招かれ、明照院の夜のパーティーに出席し、ボーイとその両親との心あたたまる集いの光景に接し、中村上人の御教化の一断面を見学し、

翌日はヒロの花園その他名所の御案内をして頂いた。二月二十八日にはマウイ島に渡りラハイナの浄土院に原照師を訪れ、久し振りに御本尊を拝み、歓談、その夜当寺で別時の開かれることを告げられ、檀信徒十数名と寺族全員と共に一時間のお念仏を木魚を支えとして修めた。浄土院は露坐の大仏と三重塔が境内にあり、寺の裏は砂浜の海岸である。風光のよいお寺、ここがかつての岸信安御門主は「ラハイナの浜辺に立てばあかねさし日は沈みゆく島のかなたへ」と美しいお歌をのこされている。若き原上人御夫妻の御努力により、声高らかに太平洋のまん中で月に一度はお念仏が修行せられている。尊いことである。

かくて私はこの半年のうちにハワイとブラジルの念仏の声するところを訪れ、法然上人のお念仏が、今日海をこえて東へ東へと伝って、声高らかに唱えられていることに限りない感激をおぼえたのである。

特別寄稿

安西法師のこと

— 奇蹟以上のもの —



小島泰雄

(大洲市寿永寺住職)

○
ここ大洲は、松山、宇和島の中間。四国有数の遊覧地

区、観光ルートの中心地として、近年大きくクローズア

ップされてきた。町の中央を県下第一の清流、肱川が流れ、美しく、のびやかな町。昔は、伊予の小京都とよばれた。

この地にゆかりのある先哲、名僧、知識は多いが、わ

が「安西法師」の名声は、一時代全国に及び、浄土宗随一の、念仏一行三昧の僧として尊崇された。その伝記は歿後三年に京都清浄華院（忍叡上人述）より、さらに数十年後、山口大日比西円寺（法岸上人述）、江戸増上寺より刊行されている。これは田舎の無名の一貧僧としては、実に画期的なことである。

現代のように暖衣飽食、信仰の心を忘れた汚濁のとき、「安西法師」の不退転の念仏浄業、その生きざまを知ることは、きわめて意義深く思われ、あえて秃筆を揮うことにした。



安西法師は、寛永十七年（一六四〇）宇和島の近くの漁師の子に生れた。天性柔和、親おもいで近在に知られ、とった魚は、生活の糧かていがい、みな放してやったという。十九歳で父を亡くし無常を感じていたころ、行商の途中、吉田の大信寺で往生要集の説教を聞き、心に深く感じた。やがて三十四歳で母に死に別れ、いよいよ出家の決心強く、妻子は修行のさまたげになると、思いきって独り者の友人に預けた。田畑諸道具もすべて譲り与

え、母の遺言であつた四国遍路巡拝の旅に出た。阿波から土佐へ、宇和島を過ぎ大洲へ来たとき、寿永寺三十四世高誉上人の弟子となり剃髪。師は、沙門安西と名のらせた。四十歳であつた。再び四国巡拝の旅に、と師に願つたが、師は、無住であつた末寺の本誓寺（注一）を与え、「お前には念仏修行がもっとも適しているゆえ、しっかり精進せよ」と、導いた。

安西は、全くの無学文盲。経文はおろか、戒名さえも読めなかつた。供養を頼まれば、ただ念仏のみ申し、やがて打ちぶしに念仏相續、俗名をおだやかに申して回向したという。



それより長く長く、たゆみなく、ただひたすらに、念仏生活に明け暮れた。本尊阿弥陀如来（注二）におつかえる態度は、ありし日、母につかえるように、柔和、真実であつた。如来様の前での起き臥し、如来様と常にお言葉をかわしていた安西。毎日、托鉢から帰ると如来様にご挨拶する――

「お待遠でいられたらう。ただいま帰りました」
普通の人にいのように、いやそれ以上に、ことばやさしく申しては、いそいそと念仏相続した。

五年、十年。二十年——三十年。

み寺の 本尊 如来とて

おんまなざしの 尊さよ

礼拝 ふだん おこたらず

恭敬 いたらぬ 方も なし

げに 一心の 明け暮れに

さながら ほとけ、人ならで

かくて 冬 行き 夏 帰り

いよいよ 高し、おこないは

ときは 宝永 六つの 年

春の ころかや、七十歳

見し おん夢の ゆくりなく

浄土に かよう ふしぎさよ

如来の 招き、極楽は

これと 示され、感激の

なみだ美し、さらに また

信心 かたく なりにける

あるとき これも 夢ながら

明年 やよい 半ばには

なんじを 迎えとらんとぞ

この 本尊の のたまえる

さて、宝永六年（一七〇九）三月。安西七十歳のとき、

法類や檀家有縁の人々を招き、もてなした。

「このごろ不思議な霊夢を見るので、感涙のあまりぜひ皆様にお話ししたく、お招きしました」

こういって、如来様が安西を来迎してくださるようすを、ことこまかに話した。

「やあ、安西、安西。われに随って来れ」

如来様が安西の手をとり、立たせられた、と思ううち

に、見るまに浄土の莊嚴が現前したようすを、くわしく話したのである。

その後も何度か夢告があり、浄土の相を感じした安西は、ついに十月一日、如来様に、ただ一心に願った。

「今はもう一日も早く極楽往生をさせていただきとうございます。一刻も早くお迎えください」



翌二日の真夜中過ぎたころ、如来様が申された。

「来年三月十五日、己午の刻(午前十時〜十二時)病氣もなしに、かならず浄土に迎えましようぞ。ゆめゆめ疑ってはなりません。これ、汝の念仏精進の功德である」

うれしくてたまらぬ安西は、法類はもとより、有縁の人、町民にこのことを語ったが、ただ嘲笑されるばかり。

十二月三十一日にも夢告があった。

「ゆめ疑うなかれ。信心堅固に、一心に念仏すべし。汝を大往生させるのは、人々に念仏を勧めんためなり。この靈夢、ためらわず語れ」

歡喜した安西は、正月早々、法類に年賀の挨拶もせずいきなり、前夜の夢告を話し、早々に辞して、会う人ごとにお大音声。

「三月十五日、大往生大往生。ゆめ疑いめさるな。如来様の来迎まちがいなく。ともどもにお念仏申しましようぞ」

これが元旦早々のこと。とうとう子供にまで気狂い扱されたが、別に頓着もなく、なおも勧め、弘めた。

三月三日にも靈夢を感じした。

「汝一人のためだけではない。広く万人に念仏往生を勧めんために、汝を大往生させるのである」

不動の確信を得た安西は、夢告を人々に語り、すべて念仏のおかげであることを説き、ただ一心に念仏を勧めた。半信半疑ながら、人々はお寺に集まり、やがて昼夜を分かつたぬ不断念仏の声は、野山にこだました。

十二日、安西は会衆えいしゅうに向い、如来様のことばを伝えた。

「真実心をもって念仏すべし。その時、かならず紫雲が満ちて、念仏者を護りたまう。汝一人の往生は、念仏者すべての往生なり」

○

城下町に、噂はますます広がる一方なので、大洲藩（六万石）でも捨ててはおけず、十五日当日には、藩の検使として、目付、青野喜多衛門、永井新蔵。代官、菊原権七。介添役、和田伊左衛門、鈴木金七、岡本治兵衛、林金八を遣わすこととした。（注3）

かくて 来れり、十五日

花 散る ところ、鐘 ひびく

清らに 九品蓮台に

上らん 折ぞ 迫りぬる

ほうしは 姿 いさぎよく

ころもも けさも 常ならず

焼香三礼、さて 西を

おがみ 終りて 歎喜のみ

ちりを とどめぬ 広庭に

つどえる 人の 声も なし
仰げば ほうし 眉 あげて
やがて 合掌、半眼に

すなわち 踊躍、身は 動き
ねんぶつの 声 さやかなり
そも ふたたびよ、三たびめの
聞えたれども いと かすか

たちまち絶えぬ、息 絶えぬ
ここに さながら 大往生
御堂 どもす 讃歎の
はるけき 世界 想わせて

その とき 海の 高潮の
あした わきたつ 勢いや
会衆 同音、すさまじく
大地を ゆする 称名よ

長く、長く、たゆみなくつづいた念仏行。おのずからに、ただひたすらに貫いた念仏三昧行は、法然上人のお念仏と一味一体。見事に光芒を放っている。二百八十年後の今日、ここ南予一円はもとより、土佐、阿波へも伝わる「安西法師」の名前は、「安西さん」の呼名で親しまれ、尊ばれてきた。強い磁力に引きこまれるように、熱心な信者が一人、また一人ふえて、宇和島に、大洲に「安西さん」の念仏の輪を広げようと、努力、奉仕する——不思議な力である。

「信は、力なり」とは、名言である。しかし、安西法師の場合、それは力以上である。信は、生活そのもの。生き往く生命——エスプリである。

安西法師は、今もなお生きてゐる。そのお姿の前に礼拝する、無心、無欲の民衆に、この一大福音を、今も日夜に分ちつつある。その念仏は、また、現在、未来の安泰、幸福を信じきっているところに、すばらしい特色がある。「現当一如」(イチニヨ)である。

だから、光であり、いのちであり、元氣であり、和楽協同であり、人間愛である。そしておのずからに、敬虔で謙虚なところ、が生れる。狭い自己の念仏が、さなが

らに時空にわたり、無辺際の広がりを持ち、あくまで生き往こうとする——。

安西は、法然上人の、み教えそのままに念仏一行三昧を行じたではないか。

「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」
合掌

(注1) 昭和二十六年「安西寺」と改称、単立。

(注2) 京都、真如堂本尊阿弥陀如来と同一で、慈覚大師円仁が一刀三礼、将名のうちに刻んだと伝う。

(注3) 大洲藩の記録、藩史「大洲旧記」に検使の役人名はもとより、息絶えた直後、脈をとったこと、「安西坊、只今、正念大往生疑いなし」と、大音声に叫んだことなど、克明に記録されている。

『念佛ひじり三国志』をめぐつて

— 編集者からのメッセージ —

さ さ き き よ あ き
佐々木 清 昭

(毎日新聞社出版局)

はじめに

『念佛ひじり三国志』(全五巻)の編集を終えた今、本誌の求めに応じて、『念佛ひじり三国志』(以下『念佛ひじり』と略す)を中心に据えながら三点に焦点を絞って感想を述べてみたいと思います。限られた紙数ですので意に満たない点はご寛恕下さい。

1、文学の眼・歴史からの接近

寺内先生の『念佛ひじり』については、第三巻～五巻の「オビ」にも各界の『推せんの言葉』としてうたって

いますように、多様な評価を頂いております。それらの評価はもちろん当を得た貴重なものであります。しかし私は、本書の意義をあえて一点にしばって申し述べてみたいと思います。それはどういふことかといひますと、法然上人に対する、より正確な、より深い認識を得るための貴重な一石を『念佛ひじり』が投じたということです。すなわち、文学者の目でもって、歴史的史料を徹底的に追跡し、これまで十分見えなかった事柄を明らかにし、常識とされ、定説とされていた点をひっくり返し、あるいは改める作業を通して、事の真相・真実に肉迫したということです。

一例をあげましょう。本誌の読者の大半の方々は前進座の法然劇をご覧になったと思います。建永の法難の動因となったとされる、例の鈴虫・松虫の落飾の件。歴史教科書にも書かれ、浄土宗あるいは前進座においても採用されている説です。

この説が、いかに根深く常識化・定説化しているかは、かの著名な哲学者であり、仏教への深い造詣を示す梅原猛氏ですら、次のように述べていることでもおわかり頂けるでしょう。

「後鳥羽天皇が熊野に参詣に行っている留守に、天皇の寵愛していた女官がその住蓮、安楽の所に逃げてゆくという事件が起こるのです。これが後鳥羽天皇の逆鱗に触れまして、そしてとうとう専修念仏の停止という、既成仏教にとっては思う壺ですが、そういうことが行われたのです」(朝日新聞社刊「日本の仏教」法然の項)。

定説が疑われていない以上、従来通りの見方を述べるしか、梅原氏にも「手」はなかったのでしょうか。だが、これはおかしいぞ、と寺内先生は疑ったのです。まさに文学の眼ですね。しかし、これを歴史文献によって可能な限り裏付けない限り、単なる推理、あるいはロマン

に終わってしまいます。

この点で、寺内先生は、まさに画期的な発見をされたのです。『王葉』『明月記』等を丹念に読み、「眼光紙背に徹す」の例えどおり、その行間に隠されているものを突き止め、空白を埋め、妥当な推理を行うことで、真実を明らかにされたのです。詳細は『念仏ひじり』に譲りますが、このことは、まさに歴史を書き改める作業であります。そして、何よりも重大なことは、「事件」の真相に迫ることで、法然上人の真実の像へ大きく接近したということなのです。

2、宇宙飛行士の眼・科学から

仏教への回路

『念仏ひじり』が文学・歴史から宗教・仏教・浄土教の見直しへの大きな貢献であるとすれば、次に紹介する事実は、現代の我々に何をさし示すものなのでしょう。か。

立花隆の書いた『宇宙からの帰還』という本があります。この本は、宇宙飛行士たちが宇宙飛行体験によって、どのような認識を持つに至ったかを克明に迫ったものです。

その中で、彼らの一人アイズリは、こう言っています。「眼下に地球を見ているとね、いま現に、このどこかで人間と人間が領土や、イデオロギーのために血を流し合っているというのが、ほんとに信じられないくらいバカけていると思えてくる」

そして、彼ら宇宙飛行士たち——現代の最も進んだ科学・技術の知識を身につけた技術者——が一樣に抱いた感想、それは科学・技術的認識とは全く裏腹の人文科学的あるいは哲学的・文学的、かつ宗教的な認識だったといえることなのです。

立花は、書いています。「宇宙飛行士たちの宇宙における認識拡張体験の話をくり返し聞いているうちに、私は、宇宙飛行士とは、『神の眼』を持った人間なのだというふうに思いあたった」(前掲書)。

それは国家の違い、人種の違いなど問題でなく、本質が見えてくる。本質は同一性である。民族国家の時代から惑星地球の時代へ。まさに宇宙飛行士たちの認識こそ、「宇宙時代」の人類の認識を先取りしたものであるでしょう。

この認識こそ、実は、仏教が二千年以上前から提起

し、今日に至るまで営々として築き上げてきた、徹底した平和主義、平等の思想ではなかったでしょうか。

この文脈の中に、私たちは、今日の浄土教とりわけ法然の思想を位置づける必要を痛感するのです。

すでに、常識と化しつつありますが、物理学、分子生物学の研究の成果が、仏教思想の認識と符合を見せ、改めて科学者たちをして仏教思想の孕む巨大さにめざませつつある事と考え合せてみると、宇宙時代に生き残れる宗教こそ、まさに仏教をおいてほかにない、と結論することが出来るのです。

3、大転換期・哲学の復権と仏教の再生

さて、結論に至らねばなりません。おぼろげながら、現代という時代が、薄闇の中から見え始めてきたようです。

ご承知のように、戦後日本における高度成長期がピークに達する一九七〇年は、公害元年といわれた年です。そして七三年、第一次石油ショックがきます。人々は、それまで信じていた物質的繁栄が崩れるのではないかと不安から、戦後一貫して追求してきた価値観に疑問を

感じ始めます。つまり、科学万能への反省です。

人々は、ようやく気づき始めます。哲学／＼生きている意味の問いかけ／＼が失われていたことを。『哲学の復権』こそが求められているのだと。この哲学の復権への渴望は、必然的に宗教／＼仏教への見直しと連動せざるをえません。（ついでに付言しておけば、『念仏ひじり』の本誌連載開始から今日の刊行に至る時間的経過もちょうど人々の認識と並行しながら、同時進行していたわけです）

このようなすう勢は、過去の実例——西田幾太郎が禅宗と、田辺元が浄土真宗と深くかわっていた——を持ち出すまでもなく、今日オリジナルな仕事を重ねている哲学者の梅原猛や上山春平らが深く仏教とかかわっていることでもご理解頂けるでしょう。また最近の伝聞では、六〇〜七〇年代に圧倒的に若者たちに人気を博した作家の五木寛之が浄土系の仏教に大きく接近を試みていることでもうなずけましょう。

このことを別言すれば、いまや時代が大転換期にさしかかったということです。それを裏づけるかのように、今日、大変な歴史小説ブームです。

それでは、日本の歴史において、今日の状況と似た大

転換期が、過去にあったでしょう。それがあったのです。『念仏ひじり』の時代がそれです。

前記の梅原氏も言っています。「日本の歴史の中で、一番大きな変革期というのは、平安時代から鎌倉時代ではないか」（前掲書）と。江戸から明治も大変革期ではあったが、西洋の国々をモデルとして日本を変えてゆくというハッキリとした理念があった。しかし、平安から鎌倉には、そういうモデルがなかった。全く日本独自の独創であった。その中心にいたのが、念仏思想を切りひらいた法然ではなかったか。

私たちは、いま、日本史上二度目のお手本なしの大転換期に遭遇し、もう一度『念仏ひじり』——法然の時代に直面せざるをえないのです。その歴史から何を学ぶか。

寺内大吉先生の書かれた『念仏ひじり三國志』は、まさに、このような時代的要請に応えうる貴重な一里塚であることはや多言するまでもありますまい。

要は、このような状況を仏教関係者がいかに受け止め、それにどう呼応するかが問われているといえましょう。

エッセイ

卒業式前後 (一)



世の中には雨男とか雨女とか呼ばれる人がある。別にその人のせいではないのだが、旅行にその人が加わると、奇妙に行く先々で雨に降られる。そんなことが二度三度と重なり、雨男、雨女の汚名を着せられてしまうのである。その点、私は晴れ男とでも言うの

木下 隆一

(随筆家)

か、旅に出て雨に降られたことは滅多にない。今回のアメリカ旅行はかなりの強行軍だったので、雨だけが心配だったが、幸いなことに一度も降られなかった。往路、乗り継ぎのため降りたセントルイスと最終寄港地のデイトン、それに復路立ち寄ったサンディエゴ

では、私たちが着く直前雷雨に襲われたらしく、どの空港もしつとりと濡れていたが、打ち水をして出迎えてくれたようでおかしかった。

デイトンの空港まで迎えに来たひろみの話によると、このところ十週連続で週末は雨だったという。日本に限らずアメリカも亦天候不順のようである。

「だから、あさってのお天気が心配なのよ」
「ということは、卒業式は屋外でやる訳か」
「そう、カーペンターホールとアーラムホールの間に広場があるでしょ」

「ああ、大きな木が生えているとこね」

娘に会って急に饒舌になった女房は、今までに二度来訪しているせいもあって、しきりにその場所を私に説明したが、私も一度来ているので、三抱えはあろうかと思われる大樹が何本も亭々と聳えている様は容易に想像出来た。

「で、ひろみちゃん、もし雨が降ったらどこ

でするの？」

「体育館よ。でも、あそこじゃ雰囲気出ないものね」

真夜中に近い霧のハイウェイをリッチモンド目指して走る車の中で、ひろみはそんなことを言った。

六月四日、朝からよい天気である。抜けるような青空が拡がり、キャンパスの芝生の緑が一際鮮やかである。あちこちに、色とりどりの八重咲の芍薬の大輪が咲き盛っている。五月三十日のメモリアル・デイ（戦歿者追悼日）には、欠かすことの出来ない花だとか。

半日荷物整理に追われる。

夕方、ひろみの寮のルームメイトであった子の両親に招かれて、車で二十分ほどのファウンテン・シティへ赴く。洒落た名前とは裏腹に、住民只今七十五人という過疎の村である。廃屋が点在する寂れた村にも華やかな所が一箇所だけあった。教会で結婚式が行われていたのである。この村では何年ぶりのか

ことであろう。教会の前のレッドメイブルの並木が、夕日を受けて燃え立っていた。

赤ワイン色の並木や風薫る

ジューンブライドにたまたま逢ひぬ過疎の村

六月五日、卒業式の日である。快晴。

九時半頃、イエガー夫妻が車を連れねて、シーモアからやって来た。ひろみの荷物を運びかたがた、式に出席してくれるためである。夫人手製のドレスを贈られて、ひろみは大喜びで早速着換えに立った。

学長の不用意な発言で物議を醸した問題のキャップとガウンは、私が想像していた以上に、生地もデザインも縫製も簡略なものであった。

「細と言いたい、これじゃあまるで花壇の

日除けの寒冷紗だな」

と言うと、

「それはちょっと酷じゃないですか」

と、女房は笑った。

「まあ、通気性がよくていいだろう」

木蔭にいとひんやり心地良いが、日向はすでに三十度を超しているようなので、これで丁度いいのかも知れないと思って、私はそう言った。

卒業式は午後二時半から始った。色彩豊かなガウンを纏った教授団を先頭に、黒いガウンの卒業生が続く。中世の騎士の行進を彷彿させる。行列の両側を卒業生の父兄が取りまいて、写真を撮ったり、手を振ったり、歓声をあげたり……。木立の中に設けられた所定の位置に教授団と卒業生が着席してからは、大体日本の卒業式と同じ式次第で進行した。卒業生二百十七名。その一人ひとりが壇上に上って、学長からブック型の卒業証書を手渡される。卒業生は握手をして退場するが、キ

スしたりする剽軽な男の子がいて、そのたびに歓声が湧きあがる。

いよいよ、ひろみの番になった。壇に進む途中、突然強い風が吹いて、キャップを吹き飛ばしてしまった。すぐ拾ったので事無きを得たが、学長に二言三言声をかけられ、それに対するひろみの「サンキュー」という言葉だけが、どういう加減がマイクにはいって場内に響き渡った。あとで聞くと、学長は、「ひろみ、気にしないでいいよ。私もキャップは被っていないのだから」と、おっしゃったのだそうである。

キャンパスは風の香に満ち卒業す

イエガー夫妻には毎度のことながら、今回もすっかり世話になってしまった。アパートを引き払って、イエガー家で借りた机や椅子

等と一緒に、二台の車に分乗してシーモアへ向かう。

道の両側には、収穫間近かな小麦畠がどこまでも広がっており、そのところどころに牧場があつて、柔和な顔の牛が思い思いに草を食んだり、木蔭に蹲ったりしている。いつか平原の彼方に日が落ちて、ふと気がつくくと、西の空に淡い新月がかかっていた。

麦秋の道坦々として起伏

野の果てに新月を置く麦の秋

シーモア着、八時二分。とにかく、アール・ム・カレッジの卒業式の長い一日は終わった。そしてこの日は、アメリカ中西部に夏が帰って来た日でもあった。

(続)



拈華微笑

——芭蕉の生き方について——

河野喜雄こうの よしお

(文芸評論家)

はじめに

釈迦が、靈鷲山頂で弟子たちに説教を終えた後、
無言で「拈華」したところ、弟子たちは何の意味か
判らなかつたが、唯一人、迦葉尊者だけが、「破顔
微笑」して、了解の意を示したので、釈迦はその迦

葉に一切を伝受した——という有名な話が、「五灯
会元」に伝えられている。
その「華」というのは、勿論「蓮華」であり、釈
迦は恐らく左手にその「華」を持って、右手でこれ
を指示したのであつたらう。

無言だったので、迦葉だけが釈迦の意図を理解し
たのであつたが、その「理解」とは、おそらく次の

ようなことであったに違いない。

蓮は、泥中より抜き出でて、あのように美事な花を咲かせる。しかしその花は、僅々三日程で散り落ちて了うのだ。

人間は五十年程、「生きる」が、その「五十年」は、蓮の花の「三日」に異ならず、アッという間に過ぎ去って了う。

だから、その「五十年」を、恰度この蓮の花のように、出来るだけ綺麗に咲け——というのが、釈迦の示唆であつたのである。

そしてこの事實は、釈迦自身の有名な教説である、

諸行無常

是生滅法

生滅滅已

寂滅為樂

とまさに一致する。

「諸行無常」というのは、生きている者(物)は、必ず死ぬ、ということである。

故に生きている者(物)は、その生命を、生き通

し、生き抜き、生き切つてこそ、死んで始めて極楽へ行ける——というのであり、その具体的・象徴的指示が「拈華」であつた、ということになろう。

クリストも、

生命に到る門は窄く、その路は細く、これを見出も者少なし(マタイ伝・七)

と言っているが、蓮の花のように、一生を綺麗に咲き通すことの出来る者は、古来極めて少なく、現代でもそう沢山は居らないであらう。現に釈迦よりも古人であつた孔子も、

君子、道に遵つて行き、半塗(途)にして廃す。

吾は罷むこと能わず(中庸・十二)

と言っているのである。

孔子・釈迦・クリストは、勿論、その生命を生き通し、生き抜き、生き切つた、稀世の人物であつたが、わが国の松尾芭蕉(一六四四—一六九四)もまた、

その生命を生き切つて、「生滅滅已 寂滅為樂」した稀有の人物であつた。

以下、彼自身の作句に依つて、それを明示しよう。

秋の暮・冬海・枯野

芭蕉の、蕉風創始前数年（延宝七・八年）の作品に、左の一句が存する。

愚案するに冥土もかくや秋の暮（向之岡）

すなわち彼は、「秋暮」風景に「死の世界」の象徴を看取しているのである。

そしてその「死の世界」とは、彼自身、そこに「生きる」ことを欲せずして「隠遁」したところの、「世俗的世界」でもあったのである。

そして、中国の古詩に、

小隱隠^{ひん}林藪^ふ、大隱隠^{ひん}朝市^し（王康熙）

とあるように、山野林藪に隠遁するのは未だ「小隱」であり、在官在市しても、尤にこれに超越し得た者こそ、「大隱」即「真隱」である、というのであつて、中国の白樂天は、右大臣級にまでなつた人物であつたが、彼は「隱朝」の大隱であつたのであつて、彼自身、王康熙の様に、

小隱隠^{ひん}丘樊^ふ、大隱隠^{ひん}朝市^し。

と詠出しているのである。

そして、芭蕉が、その蕉風樹立の前年（天和三年・一六八三）上梓せられた、弟子・榎本其角撰の「虚栗」の跋文において、

白氏が歌を仮名にやつして、云々

と言っているように、彼は、その白樂天と全く同様に、「在市」しつつ、尤にこれに超越して、彼自身の生命を生き切つたのであつた。

そして、その自身の「生滅滅已」的な生き方と、

最初に吟出したのが、「甲子吟行」（貞享元年・一六八四）における左の一句である。

海暮れて鴨のこゑほのかに白し

衆知のように、「鴨」は「冬季」であるから、この「海暮れて」の「海」は、疑いもなく「冬海」である。

そして本句は、名古屋の熱田沖の船中での吟出であって、その名古屋は、関東以西では最も有名な極暑・極寒地区であるので、その「暮れた海」は、まさに寒黒暗冥、「秋の暗」以上に、「死の世界」を象徴していたに相違なく、勿論、芭蕉はその「象徴」を尤に看取していたのである。

ところが、その「死の世界」から、「生の声」であるところの、「鴨の声」が聞えて来た。

そして、この寒黒の海の西辺には、まだ仄かな微光も漂っていたのであろう。芭蕉はその鴨の「生の声」に、仄かなる微光・その「生ける証し」を感じ受したのであった。

そして、本句は、

海暮れてほのかに白し鴨のこゑ

とすれば、チャンと五・七・五となるにも拘わらず、上掲のように、五・五・七という異形を取っているのであって、彼が疑いもなく、「死の世界」と「生の声」との対立・二律背反を、「ほのかに白し」と、弁証法的に止揚・統一したところの、非凡なる吟出であったのである。

（芭蕉は、芸術創作におけるところの「象徴」をも「弁証法」をも、その時世の言葉ではないが、ハッキリと知っていたのであって、それは彼の端言切句的美学論にハッキリと示されている。）

本歌に次いで、その歿年たる元禄七年（一六九四）の歿前二ヶ月の吟出たる名句、

此道や行人なしに秋の暮

が存する。

「秋の暮」の「死の世界」に通っている「道」こそ、疑いもなく、「生の世界」への「道」であり、それはまた芭蕉にとつては、それを生き通し、生き抜き、生き切らねばならなかったところの、詩・俳諧への「道」であつた。

その「道」への行人は、誰一人も存せず、ただ自分一人のみが、孤行・独往する——というのであつて、これはまさに前掲、「中庸」における孔子の言葉と、「マタイ伝」におけるクリストの言葉と、全くシノニムではないか。

勿論、それはまた釈迦の「生滅滅已 寂滅為楽」とも相通することは、言うまでもあるまい。

最後の一句は、芭蕉の「辞世」にして、「絶吟」たるところの

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。

の一句である。

その「枯野」が、「秋の暮」・「冬海」同様、「死の世界」であり、また「世俗的世界」であつたことは、言うまでもあるまい。

そして、今や旅中・死病の床に臥しつつ、その夢裡に、なお必死に、その「枯野」を駆けめぐりつつ、その「生ける証し」たるところの「詩」・「俳諧」を求めている——というのが、一句の句意であり、これが「辞世句」であるのだから（この後に、なお一句、旧句の改吟句が存する。しかし、本句が辞世句であることは、疑いあるまい）芭蕉が、その「死」の直前まで、「俳諧」を生き通し、生き抜き、生き切つたことは疑いなく、まさに「生滅滅已」で、「寂滅為楽」した事実を、この一句は如実に象徴するもの——と言えよう。

そして、如何なる天才・巨人と雖も、その死の直前においては、その天才性・巨人性とマイナス的に止揚して、一個の常凡人に立ち戻る。

浄土句集

一田牛畝選

評 坊守は昼間から裏の方で昼寝も出来ぬ。客あれば直ぐ気のつく所に横になつて休んでいるのである。伸しかねたるその気持はよく判明される。

凡僧は凡僧のまま大昼寝

山形 松田 光誉

老患に戻りし笑みや日脚伸ぶ
福岡 原 敬二郎

想出や昔兵隊麦の飯

東京 新井 新生

評 身体も思う如くならず、食欲も減り縁者からも死ぬのを待たれる如き病人も日脚が伸び暖かくなつて来ると、身体は動き易くなり、食欲も出て来て、みんなから安心されることが出来る。

評 麦飯と兵隊はつきものである。然し貧乏人は麦飯を食えと言われたのは過去のこと。現代は金持ちが麦飯の人が多いらしいのである。

評 昼寝している時は行儀等考へず、あるが儘に横になるのが一番気持ちよいものである。住職も長くなれば檀越に昼寝御免和尚となることが出来る。

東京 真野 竜

福岡 荒牧 還愚

晋山の稚児の行列花日和

山口 上野 明達

藤浪の香に立ち止る大鼓橋

草笛を吹いて甘茶をもらひに來

評 晋山式は衆僧や稚児の行列があるので天氣が心配だ。花日和を授かり賑やかな晋山式でありならん。

評 大鼓橋渡れば正面に、社殿があるらしい。大鼓橋を渡っていると藤の花の香がしきり、遂に橋の半に立ち止まって香りに酔っているのである。

評 甘茶を貰いに片手には瓶を、片手には草の葉を口に当てて草笛を吹いている。如何にも田緑の灌仏会で長閑である。

山形 松田 允子

坊守の伸ばしかねたる三尺寝

句碑に佇ち大楠に佇ち風薫る
熊本 山崎 石庭

評 佇たれたる句碑は大本山善導寺の新法

東京 末常てる子

山梨 青山富貴江

主牛敵和尚の句碑ならん。大楠の下に建
てられて薫風がなびいている。

朝方に匂の竹の子よく売れる

葉の花の咲きはこりいる留守の家

群馬 島津 か寿

みちのくの山間やまあい小さき鯉鱗

東京 栗原やえ子

長野 友渕旋風子
梅雨寒の膝にまつわる痛さかな

名利の参道やさし姫紫苑

群馬 島津 か寿

みちのくの山間やまあい小さき鯉鱗

東京 栗原やえ子

長野 友渕旋風子
梅雨寒の膝にまつわる痛さかな

三重 森 静枝

散る花に師の思出の限りなく

東京 真野よし子

福岡 荒牧 亀齡
さわやかに風御手にふれ磨崖仏

葉桜の寮は四階建てと言ふ

三重 森 静枝

散る花に師の思出の限りなく

東京 真野よし子

福岡 荒牧 亀齡
さわやかに風御手にふれ磨崖仏

山口 三井 寛静

花堤お国言葉の案内人

東京 猪瀬 幸子

東京 栗原とき子
菜の花や海に向きたる山の墓

蜂の巣の蠟めく寺の朝明くる

山口 三井 寛静

花堤お国言葉の案内人

東京 猪瀬 幸子

東京 栗原とき子
菜の花や海に向きたる山の墓

福岡 服部 光代

葉桜や街道並木雨しきり

東京 吉原登起子

七曲坂のあたりの牡丹寺

東京 田中 秀代

かく咲いて懐しきもの鳳仙花

福岡 服部 光代

葉桜や街道並木雨しきり

東京 吉原登起子

七曲坂のあたりの牡丹寺

東京 田中 秀代

福岡 上滝津弥音

老鶯や箱根は峠多き道

東京 小笠原香祥

番号が墓標囚人の墓驪

福岡 林 澄山

あれこれと供華の心に苗を選ぶ

福岡 上滝津弥音

老鶯や箱根は峠多き道

東京 小笠原香祥

番号が墓標囚人の墓驪

福岡 林 澄山

熊本 山崎 松子

更衣して快晴の島檀務

熊本 山崎遣迎子

大分 丹羽 難中
松の花見えななりし海のあり

風強き夏海渡る母の忌に

熊本 山崎 松子

更衣して快晴の島檀務

熊本 山崎遣迎子

大分 丹羽 難中
松の花見えななりし海のあり

倍開け五重相伝五月晴

福岡 権藤みきを

赤袈裟をかけて僧の子棚経へ 一田 牛敵

(仏)
(教)
(行)
(事)
(一)
(年)

八月、盆と盆踊り

鷺^{わし}
見^み
定^{じょう}
信^{しん}

お盆は七月の行事であるが、八月の行事でもある。

暦のとり方によって、実際の行事と季節の間に微妙な違いがあることは、すでに周知のことである。七月に盆を行う地域と八月に行く地域との違いは、何であろうか。大雑把にみれば、都市部と農村部との違いといってもよいだろう。この原因は生活感覚のちがいにあるといえそうである。農村に生活する人々にとって、季節の流れは作物の播種・成育・収穫のプロセスでもあった。こ

のプロセスを重ねて信仰行事が組み立てられてきたと考えれば、盆は収穫をまじかにひかえた日でなければならぬ。七月では季節が早すぎるのである。暦のとり方がかわったにしても、現実の生活の流れをかえることはできないから農村に生活する人々にとって、盆は自然に八月になってくるといえないだろうか。

七月の盆に帰省ラッシュということはない。しかし八月の盆の間近になると、都会から田舎へ帰る人々で道路

も列車もスズメとなる風景はなじみ深いものになっている。帰省した人々を待っているのは墓まいりであり、親戚や村人との交歓であり、同窓会である。いわば自分が育ってきたかつての人間関係を一時的に再現し、確認する機会でもある。具体的には先祖とのつながりの確認であるし、家族、仲間、村人とのつながりの確認である。

いわば故郷というどこか安らぎを与える言葉の裏にあるものは、こうした他とのつながりを想い出させてくれるという点にあるのだろう。しいていえば、自分が人間関係や村落組織のなかの一人として位置づけられているという安心感によるものである。村や村の人々のなかにゆったりとけこむことのできる 때가、夏では盆ということになりそうである。盆にかぎってみれば、祖先や村人との交歓が最も色濃くあらわれるものの一つが、盆踊りであるとおもわれる。夏の風物誌として迎え火、送り火などとともにかけせない行事といつてよいだろう。

〈盂蘭盆会〉

盆は *Ullambana* の訛言であり、盂蘭盆会とよばれて

きたが、これが簡略化されて盆となったといわれる。盆のおこりは目連の救母説話である「仏説盂蘭盆経」によっている。目連が修行のかいがあつて神通力を得、すでに歿した母が餓鬼道におちて苦しんでいる姿をみる。母の苦しみを知った目連は、飲食を施すがたちまち火となつて食することができない。師である釈尊に教えをこゝう。釈尊は僧の自恣の日（僧の修業である夏安居の終りの日）に美味佳食を設けて僧に施せば、その功德によって七世の父母にわたつて天に昇ずると教えた。目連は師の教えに従つて、僧に施食して母の苦しみを救つたのである。

この説話にのつとつて行われた祭祀が盂蘭盆会であるといわれる。しかし実際は、この祭祀がインドに起源を持つているとおもいがちであるが、そうでもなさそうである。

岩本裕は言語学のうえからみると盂蘭盆会の原語は中国語では理解されず、インドの言葉である梵語やその俗語、西域の諸言語においても理解されないという。そして西アジアの文化、とくにソグド人の文化に、死者の靈魂を祀る祭祀であると同時に収穫祭でもあるウルヴァン

という祭祀があったことから推測している。これがソグド人の中国進出とともに中国に移入され、畑作農業地帯の収穫祭として中元と結合したものであり、仏教徒が自恣の日を中元に結びつけたことによって、今日に伝わる孟蘭盆会の原型が成立したものではないかととらえている。

少くも私達が現在行っている盆行事の原型をみることにできる。死者祭祀が盆の中心的な要素であることに異論はない。これと重なって収穫祭（予祝）、中元の贈答の風が盆行事の内容をなしている。中元は一月十五日の上元、十月十五日の下元とともに三元とよばれて重要な節日となしていた。三元が道教の三官信仰と結びついて、内容的により発展したものの一つが中元であった。三官とは天官、水官、地官の三つである。天官は自然の主宰者、地官は小麦や麦の収穫の支配者、水官は米を主とする水田農業地域の収穫の支配者である。三元と三官信仰とが結ばれることによって、中元もより積極的に儀礼的な意味が深まったといえよう。

死者祭祀と収穫祭という要素をもった孟蘭盆が、日本に導入されたのは推古天皇十四年（六〇七）である。この

年の七月十五日に斎会が設けられたことが「日本書紀」にみえている。ついて斎明天皇三年（六五七）七月十五日に行われている。宮廷において行われた盆も、法成寺の孟蘭盆講をはじめにして、貴族社会にも行われるようになったとおもわれる。

他方、わが国にも古来よりの魂まつりがあったことも知られている。これを固有の魂まつりとみれば、中国に成立した孟蘭盆会とが習合してできあがったものが現在の日本の盆である。とくにわが国の盆は死者祭祀を中心にするだけでなく、イキミタマ（生身玉）に対する風習も含んでいる点に注目できる。魂まつりの主役は死者の魂だけでなく、生きている目上の人の魂でもあった。中元の贈答が親や仲人、上司に行われるのはイキミタマに対してである。盆は西アジアや中国の影響をうけて展開してきたが、日本においても固有信仰と習合して独自の発展をしてきたことも事実である。そして盆は、祖先と地縁の人々との結びつきを個々の人々にあたえる時でもあった。

〈盆踊り〉

盆が先祖や尊者（目上の人）の魂のまつりであり、これをまつることによって、私達は先祖や親とのつながりをあらためて確認することになる。いわばタテの関係の確認であった。これに対して、地域の人々との交歓の機会としての盆踊りがある。男も女も、大人も子供も一緒に大鼓や歌にあわせて踊る姿に素直な人間同士のふれあいをみることができよう。強いていえば、ヨコの関係を深めるときでもある。盆踊りも一時的には少なくなったものの近年各地で復興されてきた。そうした中で例えば団地に生れた盆踊りは住民の交歓の場であり、子供達の遊びのときであるといえる。しかし古くから伝えられてきた盆踊りには、住民の交歓という範囲をこえて、宗教的色彩が強いものも数多くあげることができる。念仏踊り、大念仏といわれるものも盆に行われる。盆踊りの原姿とみてよいだろう。盆踊りとは盆に行われる踊りであるが、その目的は精霊の供養（亡魂の供養）と豊年の予祝にあった。

しかし時代や地域の変化によって、娯楽性も強まってきたことも事実である。団地に生れた盆踊りなどは娯楽性为中心的な価値をしめていることはほぼ間違いないだろう。盆踊りというと寺院や神社の庭、学校の校庭などに組み立てられた櫓を囲んで輪になって踊る姿を思い浮かべる人々があるだろう。また阿波踊りのように町中を踊りめぐる姿を挙げる人々もあるだろう。さらに宗教的様相を色濃くとどめた大念仏の、新盆の家々を念仏をとなえてめぐる行列を想い出すこともあるだろう。これらは形のうえからは輪踊式と群行式に分けられる。櫓を囲んで輪になって踊るものが、輪踊式であり、他の一つは群行式と呼ばれるものである。この二種の形式は、別々に成立したものと考える必要はなさそうである。

本来群行式であったものが場所を固定して輪踊式となった例はいくつも指摘できる。輪踊からはじまって群行した場合も推測してよいだろう。群行式の場合多くは一定の規則があった。新盆の家々を廻りあるくことである。それぞれの家で焼香し、庭で踊り、次の家に向くというのが一般的である。現在では、七月に行われている浜松の遠州大念仏の場合をみてみよう。

三方が原合戦の戦死者を弔うために、徳川家康が貞誉了伝に命じて行なわしめたことにはじまるといふ。浜松市内の宗田堂を中心に行なわれ、施主の申し込みによつてその家の庭に入り、円陣を作りながら回向体形を整え頭先が服装を正し、仏前に進み礼拝、焼香、後、施主にあいさつする。その後大念仏して回向する。今は娯楽化している。(民間念仏信仰の研究)

遠州大念仏も新盆の家々を町内ごとにつくられた組によつて廻り、回向するところに目的がある。新盆の家を廻ることが大念仏、念仏踊りの中心テーマだとしたらそこにはどのような考え方をみることができるのであろうか。簡単にいえば新盆の霊は新しい霊である。浄まった霊ではなく、未完成な霊である。いつ危険を及ぼすかわからない不安定な霊ともいえる。こうした霊に対しては、ていねいに供養して踊りにまきこんで送り出してしまふことが必要であつた。盆踊りの一つのテーマは鎮魂であり、たたりやすい霊や悪霊のタマオクリ(霊送り)にあつたといえよう。大念仏や念仏踊がいつ頃どのようにしてはじめられたかを訪ねることによつて明らかになる。多くは戦死者の供養であり、悪疫流行である。作物に

害をなす虫害、風、雨乞いに起源をみることもある。これらは一つのものである。虫害や悪疫は悪霊のなせるわざと考えられていたからである。霊をまつことは、収穫を約束することをも意味していた。秋は収穫のときであるから神(祖霊)を迎えて予祝(豊作をあらかじめ祝う)をする必要があつた。豊かな実りは神(祖霊)があたえてくれるものであるからである。

盆とは祖先のまつりであり、それは収穫の予祝でもあつた。収穫は個人の努力によつてのみ保証されるものではない。氣候の不順は大敵である。虫害は実りを消しとばしてしまふ。同じ村に生活する人々にとって協同してたち向かわなければならぬものが、自然現象やその他の障害であつた。これらの障害が悪霊によるものと考えたとしても不思議はない。人々は共同して祖霊をまつり、収穫を約束してもらうことに盆行事の重要な役割をみていたのである。それゆえ盆や盆踊りに祖先や家族、地縁の人々との一体感が強くでてくるのではないだろうか。

舞見御中 暑

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九二―二二四代表
通信教育部 四九二―〇二三九

淑徳短期大学

学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―三―七

京都文教短期大学

学長 大橋俊有

〒611 宇治市槇島町八〇

埼玉工業大学

松川文豪

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五―一四―一

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三―一―一

学校法人 芝学園

理事長

豊岡益人

学校長

徳久鐵郎

東山学園長

石井俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五一

徳興山 建中寺

〒461 名古屋市中区筒井一―七―五七

神田寺(旧法禪寺・安良寺)

学校法人真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三―四―〇
電話(〇三)二五一―八六八三〇五

法然上人降誕聖地

美作 誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話(〇八六七)二八―二二〇二

舞見御中署

鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 佐藤 行信 〒248 鎌倉市長谷四―二二八	愚鈍院住職 中村 真道 〒980 仙台市新寺三―二二一七 テレホン法話(〇二二)九九―〇九〇三	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤 順底 〒020 盛岡市南大通三―一―四九	弘経寺 金田 明進 〒302 取手市白山前二―九―二八 電話(〇二九七)二二―〇二八九
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部 仙順 電話(〇三)八二―一三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口 善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄蓮寺	西住院 戸川 靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤 弘道 〒328 栃木市万町二―四 電話(〇二八二)二一―〇八〇二	芳泉寺 柳 楽真純 なぎ ら しん じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗教学局長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三―四〇〇〇	悟真寺 〒440 豊橋市関屋町二二二 電話(〇五三二)五二―五五六六

舞見御中

無量山 伝通院

住職 吉川 哲雄

九品寺住職

漆間 純成

〒530 大阪市北区同心一―四―八
電話(〇六)三五―七六八二

回向院住職

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇

九品仏浄真寺

清水 順碩

東京都世田谷区奥沢

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心 寺

小池 政雄

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四
電話(〇一三八)二六―五二二五

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六―二
電話(〇四四)二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸 寺

原口 徳正

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六―四
仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―二二

正覚寺住職

楠美 知行

光運寺住職

飯田 信弘

〒510 四日市市中部三―一二二

舞見御中

廣隆寺住職

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

浄土宗議會議員

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二一五一

お骨仏の寺 一心寺

高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五
電話(〇六)七七一一〇三七(代)

摂取院住職

聖徳保育園長

金子貫達

〒850 長崎市銭座町四一五九
聖徳寺中

浄土宗議會議員

光明寺住職

山口諦存

〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇

新善光寺住職

太田隆賢

〒064 札幌市中央区南六条西二丁目

暑中、お体をくれぐれも大切にお願ひ
申し上げます。

—— 完全燃焼を信仰の歩みと
受けとっています——

光心寺

北山良祐

〒425 焼津市東小川一一六一

八木善祐

〒448 刈谷市野田西屋敷二一一

昌福寺

教育図書 大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋一一一一六
電話(〇三)二六二一五九四四

法然上人鑽仰会

舞見御中

萩市 常念寺

古本超然

稲田稔界

祐天寺

巖谷勝雄

藤吉慈海

岡崎市鴨田町広元
京都市東山区林下町
大樹寺
樹昌院

大本山光明寺執事長
西念寺住職

北邨謙順

南足柄市沼田三一五

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二―三―一八

法然上人二十五霊場

第二番仏生山法然寺

細井俊明

雲心寺

桑山春山

〒456 名古屋市中区尾頭町三一―一九

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十九卷 八月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年七月二十五日 印刷
昭和五十八年八月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―一六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒103 振替東京八一―八二―八七番

舞見御中

総本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 一田善寿

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

人生は旅。巡礼も旅。道たどれば心さやか



慈悲にふれる

暑中御見舞申し上げます

中国 33 観音霊場会

会長 小林海暢
札所寺院住職一同

事務局 岡山市西大寺中 3 丁目 8 - 8 ☎ (08694) 2 - 2058

第四十九卷

八月号

昭和十年五月二十日

(第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

昭和五十八年八月一日発行